文政
新話 三篇 [illegible]

へ 13
3226
3

へ1
3226
3

昭和十年
七月四日
購求

高満宇作喜三編の序

銀漢一夢露晴垂玉鑑初上
欲圓時清搖素琴少賞的却
陰晴未可知とふ清
玉兎も十年隔てあの沿前の妹既可
朗よ詠らまんとあ
いと久しく庵のあるを

古郷は桂男が思ひ發せし舟入の春
興今年も新たなる家に家成まら
ぬて清き盛屋の横ふ是非淋ほれ
光る船乗り場よりも優のさまざまあ化ぎの
悦び浪の見れまれば安達今ふ
見の毛れ年船深くるはけ星書
煙の水長の仏仲ふ家を深らん

風情をはぐくるそい芝も密乃
青を書より淋さる松もれなるまく焼
中で駅つ見るの物語を情ふりの野り

江戸

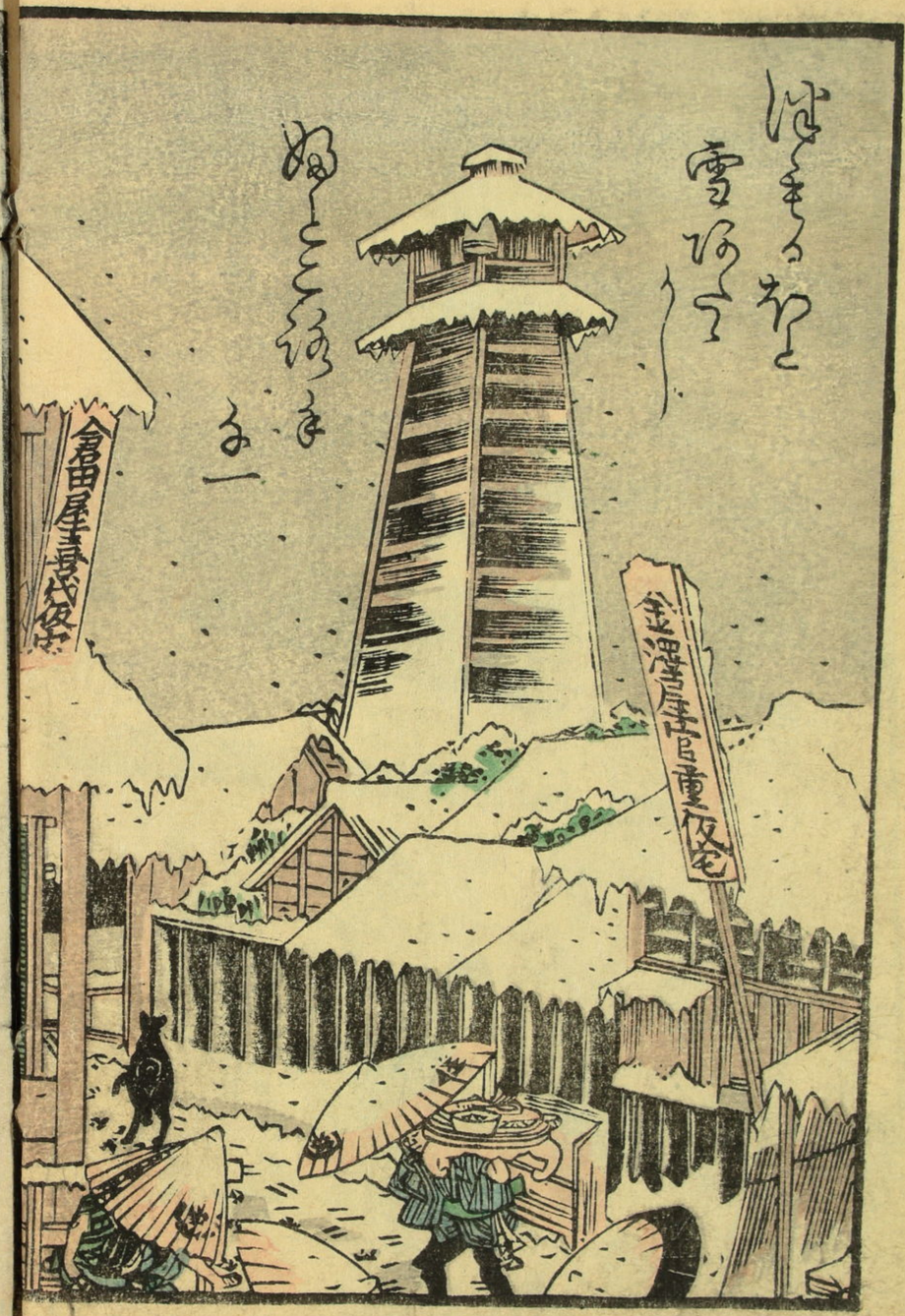
桂訓亭主人誌

重三郎
清さや
粉のきいた
か偽衣

幸

久喜万字屋

久喜万字屋



新話光源氏満宇佐喜巻之七　一名曰なぞらえ人ぶり

江戸　狂訓亭主人作

第十三回

青海原の胸もとりさく思入ひとり男と深くこそ付
たとえ場を塩の頼をけぐとうちうるゞ色ヨ中仏の助きん恨み
はるゝ色のつ祝屋ぶりもて五の宮ゝ祭ゝ舞の舞ぶ
なをつゝ共年月のゝ斯しこそ一歌流と丈高
とくすとこすくくもくるかの中を

悔て遠方へ行てさけの酒の実を盛うちかうー
ト呼りて門を打る 新内第の門徳右を捨ての元
へ借と聞てお蔦はいそぐ精身めつまさまとーる戒方
亦行末は奈何ならん不相変 縁とへ切りるぞう暫時の
中も離別て居るべ側の居るようゆうーさぶ夢るも周
果の訴乃ちるゥ昨秋の夜の覚てより花を招く夏ひー
うべ彼夏吉の信切ふ必を明を訴なふうり身の上のひと
妻ーく嘆ーけるべ元来やさしき夏吉るんべお蔦と判次
郎の巨細を不残義知して俱ふ哀を催けるべ手代な
猶も手代と世ど道理を解て頼ゆしく言も主地ら苦労
人野暮ならは故ふ他のうりも料量と眼ふ涙ーやく
ふ蔦ハ子小兒の様な風ざうすまぎ子振ふ苦労ハ為ちもい
思ひて居るのふ然やりつさのうえ夫じやうさどうが煩て
悲ーくふ病人 仮ふすと早く祈ふうち用て徐ふ主言を
うつるゥナニ子振ふ頭をうひゆるものうみ蔦のふ次第で
その判次さんとやう一人ぐうるを情人ふ持て居るひが

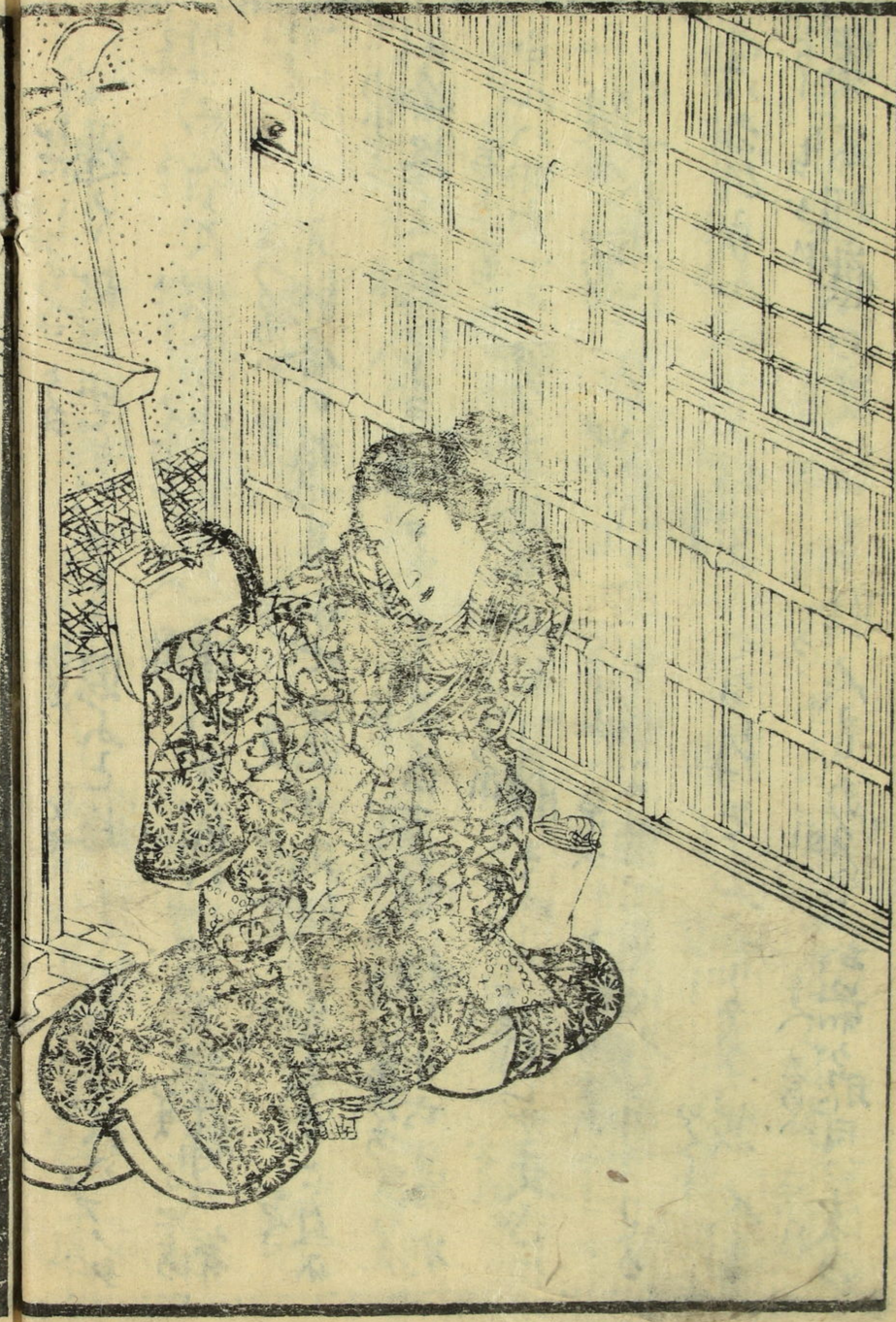
出来ものの多き手紙なる人がありまして家の
ためあつて産業を勤るものも張合のある者と思ふまで候
今ばかりかゝる産業を勤めて悔しひるまず悲しひるがあり
てもその判決者さんの為めに勤ごとおしばひきてこの公の
中の楽しみもあるべし。アノ影法師くしく変さて
判さんを呼ぶおやりなさいて私も来お人を連て初已の成さ
上でお来の公庭の訴もくしく影をまー先の公
中をも能聞れて上程じゃうまるまで家が遠て

似合ひと他人が笑いふが邪子を仕組が為くの一念で
実婦の為ひまひるでもみー亦そまが出来ぬ公の
実意づくで生涯情人の為通しても居るまるる為
ナニヲそまごろといつて當るの私が伯父さんの夏〳〵伯父
さんとも全く〳〵アレサ判さんの為めと言つて伯父
さんと言つてうして居ることでありまるヨ夏〳〵やく然る
堂の能伯父さんごなへ私も来ん伯父さんをもつて
為に懸ぐまるまーさいものごなへ来〳〵ヤ居るまるを言ふと

私きゝもつく〳〵家初ハ悔くゝて不関がるくゝて否で
ありまゝゝなんぞらゝ何様せうと思ひまゝこと 夏「ヲホ〳〵
こそ様ハ否なのが御くハ可恐なりこの人何故家初ハ可
愛なくゝて當時ハなりて可恐様よなりこらゝなへ 乗「ホ〳〵
十二今でも他人が何ごの影ごのと言つて関せると否ハ
なりまゝハ支ごけまゝ以来ゝ家ハ〳〵〳〵多の
届く程の実意を尽してやきゝ〳〵可愛がいまこと
思ひ出ごまゝこと意しくゝて何様仕様くの年数が遠

いて遅く私が生まゝこと思ふと悔〳〵くなりまゝハ。アノ少
無さんとハ家が少今の上遠ひまゝハ夏「十二當時の第
でハ事が不祝合の様でも新て家が先腹でもこと直ハ
似合様なる見へるヨ 乗「ヲホ〳〵否なるを初ハ十六家判
さんハ四十一ハなりまゝハなるを可解さハる 夏「アレサ支ごら
一も女ハ老込のが早ひらゝ手様よ並て見て釣合がつる
くハなひんなんごらゝお案じでもるひヨそゝて青らゝ幾人も
家不相應の夫婦も情人もありくなお様が肥日お後の

うつくしき
なみだをながす
川柳



お半長右衛門うんぞを お見さ お半が十四才に長右衛門が
四十歳じやアあひうへ 来ヲヤ 夫ハ芝居ごろう 結けまごろう
実ごろのに 手紙を 夏をしてやつた 行程に 他が悪く 言ろ
初まやア 使ま せんハ 私が 実家に 居さ 時に 判さんと
国伴に 請方へ 初と 毎度 近所の者が 密く 密つ ろて
悪く 言つ ろうしとのを 国まつ ろう 言 腹が 立て 不実ろ
ろくろてきうまつきんぞハ 夫を まさ 母人に 怒ろう 言と
直に 小地を 言ます ハ 夏ヲヤ 行と 地言を お言ざ 来 長

右に世ろで 他人が 請ろうぐさに さろう 伯父さんの 世
話ろ ろう ろに 右ろ ろして 結且那で 取て 親ろ 生涯を
さ せろが ろ 右ろで の人に 彼見と 世話ろ ろ ろて 居さ
日ろ やア 手鼻の 立鼻の 彼子を さ ろう に 極つて 居ろ ア
ろんぞと ろう ろう 他人が 悪く 言さ ろう に 若い ろに 夫ろ へ
夏ヲヤ お茶の 了簡 ろ ろう ろに ねく その 判さんの 女房
ろの ろ 居ろ ろし に 右ろ ろ 言ろと 思ろ び 疑別の ろ 居ざと
言 居ろの ろ 物て 居ろの ろ 極意の 底が 知れ ろに コ

マア素の気の強さうなお方何様きること宜しいようなことを
松ふお聞せチ　糸アノウ公のちの落付様よいは判さんが
内宮さんがあくりて宮出二年ぶ若くつて私と夫婦ふ
なりても他人が勧めさへ仕るひけまこば俄金毎人が何と
言てもくまつど判さんのいい内義さんかうり度ざるる
まいか　夏へ来ーーお祭り三日なることを知事さまへあつく
熱く考へて来ると判さんとやらん何所ぞ訴ふるお祭が帰込ぎ
所がありて何卒参るが来ると所の通りの中かがうけまこば
俄と言ふのごらるるア早く言べ十ヲのあうち七ヲ悪く
つて言だりハ気ふ入て居るらう捨るのも居うり持て
居ると他人が彼是いふふ外ぶるるひとおりつても
亦二言の中ふ言ふいはるひるがあるうう積くと遂
つて意しくるるのごらるるト言べお条ハ頬赤ふ恥ず
そふるはごりう意の楽屋の物語ハ知る人ぞ知る意味深
長作者の筆ふ著し難し是より後ふ夏言ぶ帯
お条のうるや　うぐさるふ判次郎の帰を言出し彼是と

吸ひ合ふ引くらべて思ひやる心の底も許さず隨ふ
うらざる情の厚を汲こなせる夏音の実意を候て
気をたげ又は茶ハ元来茅屋粗末の姿ふ知
用ひ化粧衣裳髪のうざり十分うして産衣へ勤ム
筆客ふ毛相ふく髪ゆき中間多くの
寄のひるきをうけ新嬢と又ども 祥則よく見ふ指
盤昌寄ーくバ今八ふくふ自ふく析帯の判次
帝位母て十二彩ふ拵び楽しくふ亦或時ふ乗
本ふにがのうて少地ふのうふ例の判次帝と思ふ
向化ぎバやぶ七二潜の産婦ふ彩バ判次帝ふ
思ひうけうき女客美ひ顔七居る少お乗ハフト顔
赤く気ふ毒ふふ産ふ美て 乗へヨや 結人ふくさんど
きーふふ伯母さん。祇ふ出て成て兵下きふさへト言ふ、
脚を痛ふうざふ只 何ふふく楽しくふ眼ふハ楽ふ
ゆて乗へ伯母さん寛ふ久しくふ敬ふ上ふひふふさ不
寛ふとふ思ひで 兵ふ産きふ 遠ふしを兵成

まーヨいよ〳〵ナニ何様しても左様男よりあるの私ども直
ふも尋ねて来るのごけもとでも 伝八又さんが朝夕のようにそば
ものの多くの減多ふ家内うち居る成ど私い意角不憫ら候
ひて庶ふだりいまそ居るうち 紙のうを密ぶ多くも
ちろうと 島渡ハ来ら 三沢判さんふ 巨細似見て来て知ら
頼んでも 竹源じゃア お茶の毎日の所為が悪ひと腹を
立て来まで 命のある様よ言て此地へ頼んでも宜一返
るをとるるひ うらさどおるが 細ごうそ居るうちふと

密じ多くも 不月日の言ることる今日までも来ばふ居さ
うふ不実ごと思ふどうふ けもとでも 仏ふ如来のうへ
うふ必ど悪く思ひ 紅成チョト言うるうら 傷ふ 持参ーー
小風呂番の 結びを解て 様出しうる 言葉の女ふ
思と実 集ふうる 信実ハ 金言ふうねどうー 頃
今稽古ると言思ハ 湯ふ 数多ふ 所の名ーー
ようも 深き 底意のうる 猛さ お兼ハ 伝と 後 投ふ 優
外ハうりけり いよ〳〵アレサ多うーうて 涙を 落

えんぞ有て楽しみとするが有るのゝ有ふるひが久しゝぶまで
松が来て逢さのごろふ機嫌を直して法ゆうんな
サアコレお茶の好る人形を持て来るコヨコレ番ゆえ久しい
好茶よ泉貝香の所へ行ゝて遊ゝのが御ゝ出まこ
のごヨト七八すある木彫の人形 浄瑠璃 仕掛の
細工の名人と世ふ有ふ是ゝ東西國の泉貝香がとゝ
らへる細作人 判次郎の宝玉を深ゝ衣類をいちも
かるをお茶の膝へ差置ふう

第十四回

既にお茶ハ判次郎と密ふ契りゝ情合るゆゑよ伯母と
ゆるふ伊代へ対しと只何とゝなく気の毒の思ひどお伊
代ハ一点だうも手繰をとゝ知らもせず今ゝ此泉貝香の
様子を聞ふて有るゆゑ相考ふ自捨びものゝ丹誠しとこ
ろ人見る手人の文夫と密通のゝごゝがゝるべきゝゝ勿体
ゝ是非とも如何あらんとあてお伊代を実の母ようゝ大ゝ
せぐハ是ゝまでの大恩有ゝ是ゝ知らぬと他人ゝ待て情ひ人ゝ

思くび苦もめるるぐんと思案をして兼ヲヤ伯母さん親さま
毛ノ付る中らふ お糸さんのるを見ハ出して種く気を痛めて
居りまし〳〵ハ いよ〳〵ヲヤく伯母様私のるを見ハ出して大種よ
気ごろのむのごと 兼ヘナニ不のるてふるませんぐよ 今まで
私ガ実家不ぐるるを世るのるを知らふ お糸様ガ
可憐ぐんてお呉るのを 沢山そふよ思門て居ます〳〵ぐよ
山頂 諸方と他人の中へ出さるて種くな 人不知己ふるて
ぐるると貴地の恩ひるるぐるで実不楽〳〵ありまるハ
御〳〵今ふるるて お糸様の可憐ガるて お呉のガ身不深と
知るて来ます〳〵ふる家早人今迄の様よ赤信を言て祝
気不る門てハ居ます せんヨ伯母
さんハ不実不嘗る様ヨ言ハ 住ません今まで御るハ
伯母様 遠慮して お呉を成ヨ いよ〳〵代服ハ例ふるハ改
まるるて言出しこと伯母様ハ 私手紙るるを言ヶ知るハ
明さんや私を両親の様よ思門て居る お糸のるるふ代
言ぐるるるふ ぜそ気で居るハナ 代来ス 伯様るるて お糸の

身が堂くへ隅て居り給るゆゑ亦立身出世をまつ
ゆゑ仕合のよいがあるゆゑ知恵をつけ是ども人幸らよが
悪うらへが仕身はお茶の棚後棚をあつて出るこゝろ
うのくび堂を表仕なさんなヨまつ仕身は病身で世ても
長命も出来ぬ長命をしこ所が人並の役わい立ぬ
ゆゑ可成ゆゑ茶が宅仕茶を立て居ると判さんの
内義さんの名門でもらって仕身は病居でもしくこ
位よ身の保養を仕度とおもふにお茶も稽さと

母ぢが気絶うむ身分ゆゑ急ぎ出来ぬ棚後ぶれ
ぶり判さんの内義さんの名門でもらって仕振る赤みでも出産で
呉まいりと言まてお兼胸ネギクリさてい我身の
不義を仙時知って居るゆゑ立番を出せしる
らんと推量さんれば多くお面目なくさ〜病きこころの
中ハ判決帝の名出しを せしを服もし〜赤恍惚さ気
仙とやら嬢〜ゆゑ初花の咲ね蕾の頃より〜七所廻
ぐつまー弟後を思ひ出せて哀しくなり きを哀しさ合

よりて思ひ切らねばお伊代へ対しても済まぬ義理
ぞと思ふ義和しるべく案ゆるねば性悪しさぐ先達て注
ゆ糸の新乃もるく思ふべワアッとひと伏て身を振ハ
まで居ようけるよ〳〵まく此度い仇恨しこのごろ此月の
言ことのが気ふ障つこのうえコレサ腰を立て成るヨ仇も
思ふで言ことのでハるいヨ浮世のるぐ貞中ふるるふべ
仇幸然しとこと思ふうう言ことのごうナるるべ腰を
立るきんなヨヨサ　伯母きんが久しぶりでまるこのごろ

子機嫌を直して仇ぞおさるるでも絵るくサア一トハ
の春で気を晴しるト多うべてあり〳〵酒肴を此時始て
身を付ふ人原来此所へ酒食のるる人程びふまり〳〵
お伊代ハあらべ義て判決帝とお案の縁を楽しと
彼是思案の上ハてお案の極意を礒礼〳〵この
身をゆしく不自由しても お案を案ずべ家内へ入て
判決帝と三人が朝夕同居よ活業ふ生公の中
ゆ糸ぞ案ずが先ぞう帝のるるべ代土地ハ

お伊代が赤心
お糸をあらはさむ

一二枚筆ふ小況が料理の種を食べども さるに
其美をぶ美人ぶすぶふ心の黄昏まぐその拙に金へ
さるに〳〵お金ぶう一枚ありヨるぜこそ私ホ寒りぞ
汁り居るこぶま私が物もおれ身を知ることおりて
ろこのぶふいつト優しきお伊代が涙ひらされ
お金へ寄り〳〵新をあげ涙あぐ〳〵の泣笑ひまぐその
拙に成ぶとりて〳〵私ぶこのが折り〳〵紙毋
さんが新して慈しぶぶて お長ぶの小猫しのが解りて

涙小熊〳〵ぶ涙成ぶぶう伊ぶ〳〵ぶんぶの
ぶぶもおれの毒ぶぶぶこぶ伊年拙さん振ぶ〳〵て
お長ぶぶヨ〳〵ぶぶ小法毒熊〳〵小法毒涙の
ぶぶるのぶ人情ぶぶまぶくそんぶぶ小熊ぶ〳〵ぶ
〳〵お上ぶヨト物ぶぶまぶ〳〵ぶぶぶヨ金伊おぶも
お新りの新ぶ私い一向猫られまぶんぶぶぶぶぶ
ぶ小ぶまぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
て些ぶぶ猫ぶぶぶぶぶ小熊ぶ拙ぶ

ちやゝ皇おおハ化の孃とちがつて円乳ぢゝ豈
お酒でも若ゝふが皇のゝ私も初つての通り酔まり
夕涼くい結ものけまど金陣お酒といふりのい人の乳と
引きて皇のさゝ一ツおくゝ人へ三ま拭ふとて分
ちやゝいけまん人へ支でもおかおゝ弱ふ美られて
ちゝ乳つとおきゝやゝふいろ乳して基ぢ私もゝ
おおごヨト戦ゝまあぐゝ酌酒ふ二人い眼のあゝ光
のゝとお釜い痛めゝ物さへもかゝふ開ゝ乳地して

私ぢ方ふ右ト涼いろ法ぢあるゝ何卒解ゆおゝしい
引かゝゝめまゆうゝて釜ゝさヨトお伊代ぢ酒お釜文
ふ松ゝさ拭らむ影ふ解ふ拭らゝ人へそゝゝまに
た拭でぢいまも私ぢ弄へ出て二三ゝるゝ釜ゝの
娘ゝでお酔ゝんといふ孃ぢ孃物で汗品ゝの書ゝんゝ
いふおゝの世孃ふ乳たれするゝ意毎まで楽ゝ者ふ
あゝて儀俳ぢゝと高切ふ云て昇ゝまんゝ人ゝ
ゝゝ四ぐゝぢまど手私の方ゆゝ入ぢあゝまんゝゝく

考へて此様に考へまゝ申さうと云ふまで考へまゝ下ぬて お
伊代い蔓茶〳〵と左様ぢく人が言切らく云てゐ滅茶
苦茶許りをさんお化人の中い怖しいめ有く泡ぶいあう
あいヨと云ふまゝ左様ぢう心も有如い氏なくて玉の楽と
やら百一組人ぶ名ぶまて無ともく楽に言ふ世界ぶ
まゝあるゝいよく左様とうん様ぢつけべ不知い濃と云と
中〳〵私ぶ源いう洗ふものも化ぢやうぶ義母の方ぶ
化の様う新う様ぢつけて新おと私ぶ方へ引ふうて今まぶの

御蔭さぶ忘ゝめのう先ぶいなるお伊代の冠判
沒ふのその中成新つたの赤丸とそのうのが義ふ角
角ぶ忘らまを和うまと言ふ新獲さぶ名いきうに
蔦い屋おうゝお伊代ぶお葉ぶ兵を名ぶつと行つめて
ふ〳〵あるをどうよく老年ぶ以前ぶ自色ぶ抱れて
やくぶ云ふぶモウ言様ふ事情ぶ為とよく此方い化
れゝとしふのいぶ三咲ぢやうるのいちおも此代まで一伝あ
少女ぶ名ぶ芸この名みめのさうゝ大人遣うて也

とゝひ可愛らしく新ぐるうて化粧の仕様が宜しう様
ぐの小間小立ヨとまゞやゝ お家れ中小彼是とゝ人もある
ぐらうぶ活業づくとい ひぐゝ減多ゝ人小才を任せ
さんるとゝよい代でも多の ひがちゝ減又と新い様さうゞも
しんをとつきあの 家底附合て又まゞ家ひの和る人ぐゝ又是さゝ小
つ人てゝ 世の小合この人小才を任せとゝ何も不自
ゆゝ小ゝ家ひとゝ立ちゞひゞ多いものを万一悪い人小
見成有ゝれて又ると来活様才の迫りとゝる危も南も

ゝ小ゝ人一所小義して居ゝ今ゝ又要 私小不新ゝ家
ゝ一病ひとゝ人も判ゝんゞゝ蔵男とゝけるも
元のゝ出さゝ来て元の為ゝ家ゝ人様扇ゝう情んぐう
為て世様小ゝ多ゝ由居ゝ小ゝ居とゝゝが公
家ゝ世様とゝ多ゝうとゝゝで自化傷ゝゞけゞ長様
しゝゝ家ゝ小ゝ家小元易ゝ家ゝ宜ゝうとゝ様ゝ小元と探
でゝんゝも和ゝ蔵新の汗元様小ゝ私も実小関ゝきるヨ
ゝれ支ゞけゞゞも永いゝゝ小ゝ様ゝ万の和ゝう支小

就ちやうそのとし紙おおかた彫しそうぶんも吹さいとおつて
ますくと今日まとのごヨト例ふうぬその伝実の情を
も篇く物と回答さくるびのうりの目
ふうるむ濁紙ちめ教ざる仕を彩てお伝いよれわどふ
濁分清ちまとをこ小来ぐしと帳式若ぐ家をさて
立ちへる踊日ち篇ど角れうも花小あるん号宿よ
ゆくく篇ちのべ

光濤新話 玉手佐喜巻之七了

光濤新話 夏満宇佐喜巻之八 一名曰あぞびへ於半

江戸 狂訓亭主人作

第十五回

夫人間一生涯の中ハ福も災も折節ハありて定りなき
富貴ありとも世路まどろぶ貪しく経営の畳りとる
吏ありとも公務大丈夫ハしてカを落し胸を痛める
あるとハ不可有清ハハ七浦びハ起とうりへば必ず危難の
勿死ハ消えて喜悦豆下ハ生ざる節もあるうるふぞ

短慮なる所為をして身命を滅ぼし後悔の沙汰なり
べうべう往古癆瘵を煩ふ人あり其病二年程のあひだ
なり只鳥類の肉をのみ好んで食し他のものを不食ふ
鳥の肉も一日なりとも不食ふあのぐすとなるべきなり
肉を食する時刻が半時も遅くなるべば腹痛て堪え
がたし然るべば病ひ衝くふ重くなり定早命の際
なども思ふ極ふいろいろ須家内の者どもも癆瘵の傳
染をおそれ病人を別室に移り住せて一人も
侍ず人ふ只死ねよろしとの風情ふて捨置しろ既ふ
食ひも不へざるべば持病の肉食を好まずく飲ひ変り
あるまじうあるとも一室ふ押込らましの表飢死の外無
所へ或人ありを聞て不便ふ思ひ鶏の肉を送り自ら
煮て給ふるく極ふ鍋り絞まで ひそうふ煮へしけるべば病
人の悦びいふん方なく是を喰んとするふ胸がむかくと
なる程食し度ふ成て口ふ含を溜るばかりふ成けるが
鶏の中なる鶏の肉の黄立匂ひふ鼻ふ入り好味ふ腹ふ

ちくとのまぶ 寒早 言ふる 時分ぞと 鍋の蓋をとる折
うち 銀 病人は たちまちぶも 噴嚏をさまぶ 鼻の中より 紅の
おびたゞしく 赤き 線の 拍ある 虫の 長サ二尺 程 ある ぶ 飛ぶごと
今 熟せんと せし 鶏の 鍋の 中へ 飛入 けまば 病人は 我身
ちぶ ふも 怖ろしく 驚きて 手 脛は 鍋の 蓋 として ちろう
押へ 彼虫を 煮 殺しける ぶ 夫より 乳 ち は 腫 くしく なり
癆症の 病ひ 程なく 全快 とあり 常ようも 壮健 ある 人と
なり 長命 得 ようとぞ ある 医書 よ あり 慧

病ひは 看病人と 医者の 丹誠 ぞ 必死を 救ふ 第一 亦
定業 ぞ ふ ふ ぬ 者 とは ふ も 深く ひ ぶ 人
情の 極意 と 知べし 麦 は 婦多川の 芳賀町の 裏借家
は 最 衰 ある 貧窮の 親 あり 元は 由緒 ある 人 なり し
親 ふ と 貧 ふ ぶ は ぶ き 拍 ある 衣類 を 売 て 髪
油の 艶 も なく 垢づき 襟 ま 顔 も 足 別 て 親 父は 大病
みや 夜 と 蒲 団の 家 卧 枕を 上 る 雑 義の 躰 その
側 ゆ 看病 ふ は 年齢 十六七 歳の 黒髪 を 垂て 色

白く眼元口元間へしきりの月ゆも花ゆも言へるも
きく麗しく見えて人形の作き見侍へ當世ゆ面一番殿
さるの如くさるとて野暮なる侍ゆへわるぐすべてゆの
ゆらゆうとバ女のゆを帯髪姿ゆして垂のうと思ふゆも
ゆうしとど或時父ゆきゆゆ向ゆ父へコレ錦法帯側へ出成
錦へアイ仰ぐ所用久父へイヤ今きゝうる用らでゆうゆ
方ゆ言聞らせて変りゆるうゆ其隅の所ゆある古書
箱を古人持て来成錦へアイめの箱の下ゆ入るのでぶら

まゆ父へそたしう然ゆ入錦へアイ仰ぐ仰るの後ぎ
の時ゆ見へるくゆりまゝとゆうゆ沢山ぶらゆ入ヨト言ゆ
ぶく立て先隅ゆ積うきねうる離具を長除下ゆゆう
ける書類を引出父ゆ枕元へ寄ゆ父へうてゆの
蓋を除て中ゆゆるゆの父出しる錦へアイト返ゆと
ゆうゆゆ蓋様のけて内ゆある古衣の切綿の屑
まゆゆ上下肩衣のきぐろゆ取ゆ出ゆ父へイヤ長
中ゆ反古の一束ゆしとのと郷用結の俵の切ゆ白ぐ

銀左エ門
銀次郎貧家ニ
病親をしたふ

銀次郎

物がゐるとぞ　トいへば錦次郎は葛籠の中上より底
まで探し探し幾度となく尋ねまでも言ふる品の有
ざるべ　錦「何程も手程なるものゝ見えません　父「ナニく
探してもハト言ふべく乗もまづう尋ねしが一向ふ
めりざいなし　父「ハテナア夫でも。アノ小形さうの葛籠ではな
なる紅んめの小葛籠を持て来るト いへば錦次郎ハ
聞くを異ねまづーて錦「アノ箱ハ小葛籠ハ
ぞざるまいんト言を聞て親父ハ大いに驚きー箱よ

り父「エ様アア尋ねて見やまとうてハ大変ぞ　錦「ヤ何ぞ
大切なる物でも入てゐるまいとう　父「さまでサ　先祖うちの
由緒書と感状が三通り先殿さまの四国入の時に領分の
調を仕作付て書記しと帳面が一冊その帳面ハ今ハ
蔵殿が四入部の時ハ為度お尋ねのある品ぞ浪人仕
て不実不用捨るものく何程手程なるもの
繕きめもなくふと大切にして置さのぞ夫のくるを
手方を得泰がなるべく他家を主取させる時の文に

ゆえ　父「エ様アア尋ねて見やまとうてハ大変ぞ　錦「ヤ何ぞ
大切なる物でも入てゐるまいとう　父「さまでサ　先祖うちの
由緒書と感状が三通り先殿さまの四国入の時に領分の
調を仕作付て書記しと帳面が一冊その帳面ハ今ハ
蔵殿が四入部の時ハ為度お尋ねのある品ぞ浪人仕
て不実不用捨るものく何程手程なるもの
繕きめもなくふと大切にして置さのぞ夫のくるを
手方を得泰がなるべく他家を主取させる時の文に

金ゆと公がけて浪人中の仕義ゑも出して生つぶ
自由なぐら秘して手方ゑも言ぶゑ壺と金ゆが五十両
補衣屑へ包んで入て壺のごとく仕事終入て五
出して見ると顔色変つて せき立の象錦次郎も胸ー
錦ーエイそまくゑ手大変なるとぶざるまぶと周章さぶー
求ゆとぶもゆ狭き家内のるまぶ外ゑ寄ねゆ方ゑく
公當りもゆきゆゑゑ途方ゑくまて海鼠と仕錦ぶ郎ぶん
何様さぐしてもござゆません考て家見ぶゑうゑ此

間の火鉢の時ゑとり先ゑゑ遠ゑ だざるません行を
運び出しと行ふ風様の仕掛通り 請方の荷物ぶ出て
積うきれてゆりまして他人の荷の中へ紛見て仕
まりとゆ盗まれしゆでござるませうト 言へば親父ハ
當家ー我子の前へ面目なく顔然として居ようーぶ
公の底ゑ覚悟をー 父へイやく仕ゆるゆも時節ござたと
盗まれても紛まうて見うるぶ注方ぶゑの
まアく 此箱や葛籠を引出て仕舞て居ろト平ぶゑ

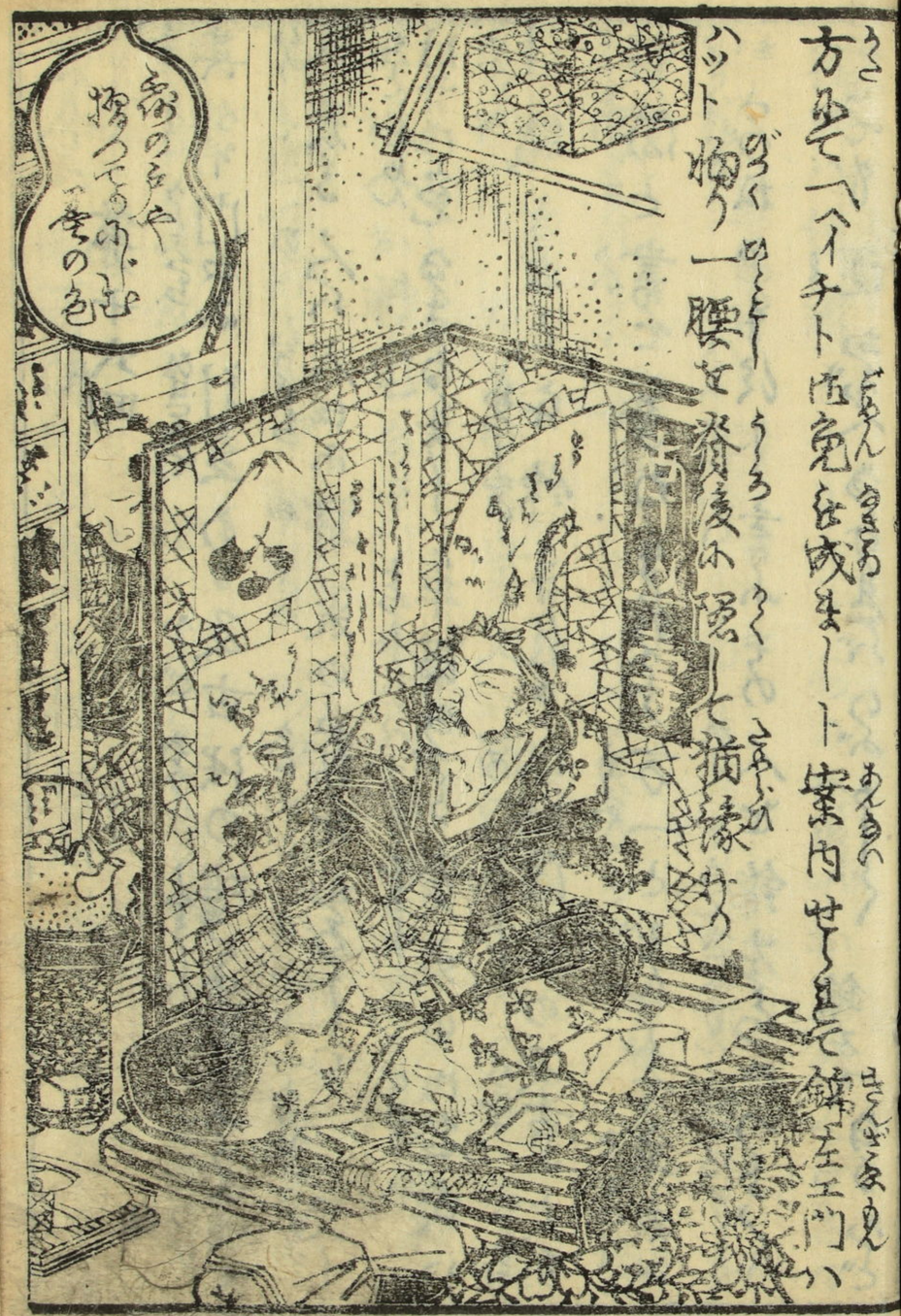
言葉どもかをくいとぐ病ひに陳りてや胸に押えて苦
上にさし侍く当義をうり錦次郎に公をあふして錦
郎さん何も手柄ハ気を落しなさるぐと宜
産まれ何様でお屋敷ハ後人をうり集門で居
ふ浮系をあるハも及赤他へ主取をいとぐ
どざるません毛ハく武士ハ思ひ切て何ぞ商ひも
ちづゆませう若うまれバまぐ少しのお金ハ私ゞお渡う
中ものどざるまし却て気楽で宜どざたませう

お案じなさるましナト言ひて父の赤の側背中を
撫つさすりつゝ介抱まれバ猶更ハ孝子の父ハ
量り涙くのを案じて奈何ハ為さんと種々ハ
胸をいためて苦しゝける錦「ア本ニ案じて居ます
たがお薬紙を先刻お医者さへ呑て来ます
鳥渡取てまゐりましヨ父「ヲ何卒然して呉
大きハ病ものいとうトいひ錦次郎ハ
呂敷を手ハ持て久呂繪町なる医者の方へくとり

取り出て行ける錦次郎の父は綾織錦左衛門
なる浪人にて古主人の為に忠臣義二の侍なりしが
主君は弱年にて家老と用人の權威つよく家中
おとろへ家老は福にて主君よりも富主君は
てもきぐ〳〵ごとく侍を錦左衛門は主人を諫めること
數度なりしが切年より家老どもは押分きて成長し
なる主人を見ぶ領分のうちも家の政をも明白なる
元は極不自由にて家来は内〳〵私欲の金を貯へ

主を輕蔑する者のみ多し錦左衛門一人の
忠義は多くの侵人の如く將まるに正直なるもの
憂言は蔑まれ悔しくも浪人を遂しなりぬ錦左
衛門せて我身の出世をとかげける富くも文食の
金も乏しくまれも乱るやど悔き歌き情越
行末成思ひまはまるふ病苦しなる我あまた
錦次郎の身の妨となり果しもあらね貪欲やがて
姿の花も散り他も見賤き時となりて社主衣も

するべうぶ世ハ存命用要もあるまじ身を捨るべうぐハ
我みのるとも　とめらんハ未練の所存ハ侍の恥なる
べしと覚悟を極め傷を這ざりまづして蓋も夜まこし
硯箱の古筆を採出し錦次郎へ遺書せんと公の中の
思案のわづを亂さる半切紙へ忠義の心底奉公の
上意まづ　ちらまづと取ふあらねど親子の別且遺ず
亂るく悲涙ハ我度とるく書そとるハ筆の命毛尾くも
止めて説ハとるこの刀の柄ハ握ると祈うう陳ゑの外の



第十六回

其邸門口ハ引戸ある反古法の障子をあつらへて入来る人ハ入口ハ野菜の籠をおろして「へイ貴物」

はい亀さまるまゝ　幸爾おぐゝ貴丈のお名氏ハ

綾織さまと云作まいらお陳子の反古ハ大分

綾織と書そどざるまいらゝ万一とぞんじて幸如ハ

おさづね申まいらト言ハもの人を錦左ハつゝく

着ても視おぐゝ申まけまいりぶゝく　錦左「なるかど

名氏ハ綾織と申まいらが俗の用でお尋ねくださる

まいらゝ　貴物「ハイ然でどざるまいらば大方遠ひなた

ざるの屋まいらまゝ　錦左「ハア何でどざるゝナ　貴物「イヱ鬼の

るでどざるません貴丈ハ此程一丁堀のあゝふ此

土地へお移宅なさゝしるでどざるませんゝる錦左「

ゝど然でどざるがお名ハ何方ゝふお出でどざるまいら

貴物「へイ私ハ彼地でどざるまいらが小名ハ遠ます

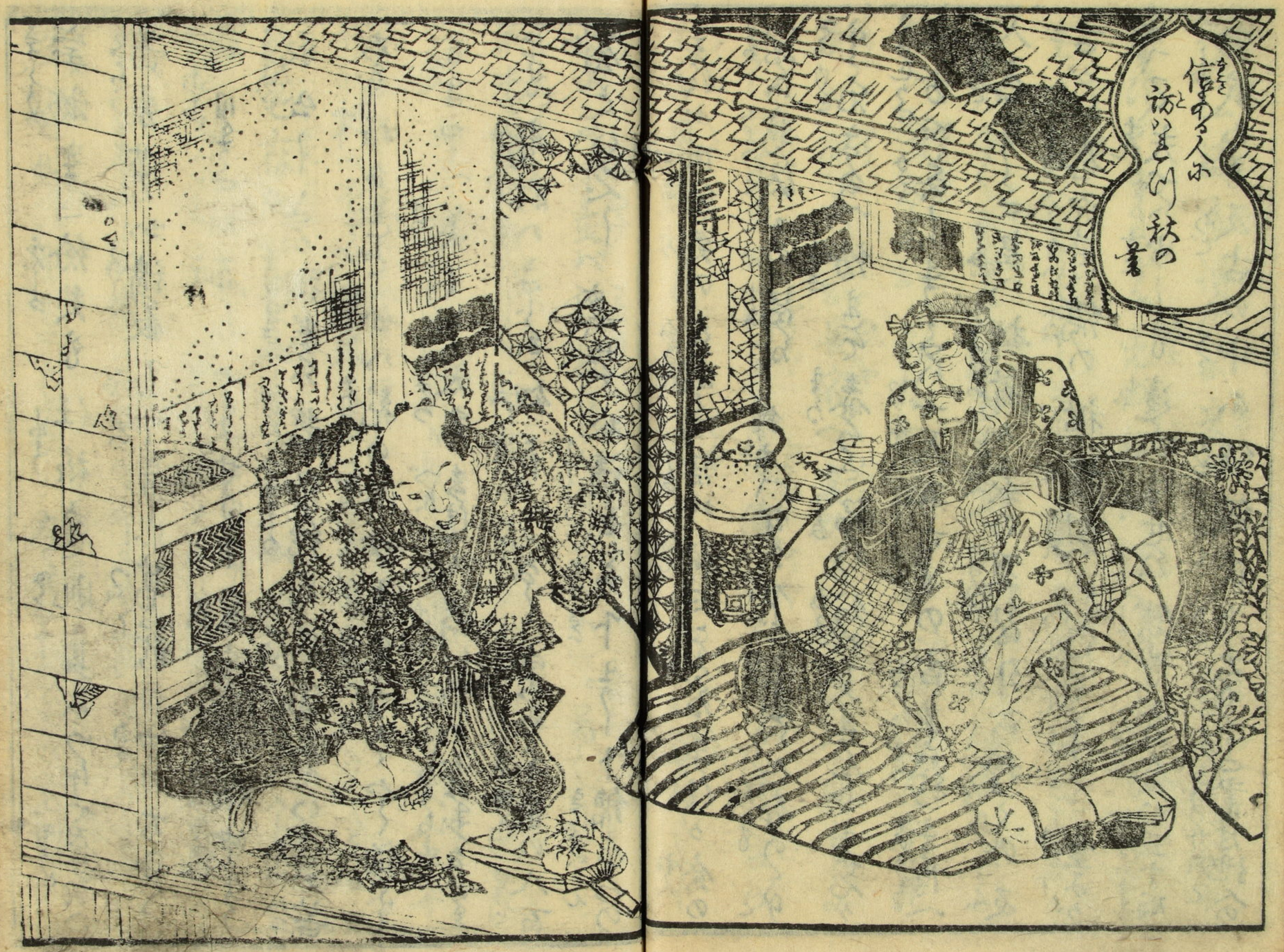
ゝ今ハ和哥濱町の裏ハ仮住居をいたして居ります

八百屋太郎兵衛と申します者でございます　錦左ハテナ
私も類焼の難に逢ひまして　漸くと此土地へ来て
新義いたします　太ヘイ定めて左様でございますう
さて吏れ付きまして　何ぞお見失ひなさいました
お道具はございませんと　問ひまして　脇ゐおいでなる
番一と思へば膝をまくり　錦左ハマア此方へおよりなされて
お下まし　宿中ゆゑに　お茶を　上がりなさい　出来ません
と　錦ゐ此通り見苦しい宅でお香ばしいが　何卒此

方へ　太ヘイエ　うまいお構ひなさいますナト
言うが　青ものく　拾ひ籠を　軒下へ　元寄て　錦左ゐの
側　ちらくまみよう　太ヘトキニ　只今　やまし　お道
具の紛失ゐ　うんぞ　お心　あるうがございますナ
錦左ハ　なるほど　此方ゐ　うるひまして　ゐもございますが
左様ゐ　お尋ね　お下のゐ　何様　ものでございますから
太ハ　さてさてございます　此程の火難の時ゐ　たとひ
出ハ　まして　物く　まぎれて　運ひ込　呉ました

その一品を傳へに来て品を人の系図ぐらゐ
まいらがまきりに元の御身端人捨ら主へまいさま
ぎ主へおうさーやを名當へ知まどとん
どころまく中を改めまして出名氏が知まーさ
うふ諸方とおうさづね中まーさが一向に知ませど
今日今古のお長家へ廣へに這入りて見まーさ
まづ竹方のお障子に綾織氏とあるーさ及古が
大分見元まに ゆ系一とぞんじてお暮れふー

まいらが此紛失の行成さ品ハ何でござるまいら余の
寓に島渡その品成錦左へまりやどこまに出なのるり
そのもと元さるへ紛まて泰ら品ハ何やらそんでませんが
私方で去ーまーさ一尺五寸の古葛籠手内へ
入置まーさ品ハ拙者が家の系図外に種くの及
古が一巻邪内縞の襠の襤褸裂に色をまーさ金ぐ
太へ夫でハ此ーさ遠のませね結も古金で五十両
色紙ぬも及古の中に綾織氏とあるーさ書状他の


信濃の人ゆ
訪いまし川 秋の暮

宝物まこと紛失も仕様うと思ふ身つけて盗賊の
苦労。サア御遣取出下まし　葛籠の中のあるべく
明日まこと御取出下ませうト言ふゞく懐中より
取出しゝる胴巻ハ岩附信の多織おそいと見苦
敷き板ゑまど　外ハ花の山吹色光りうくやく錦ふる
まさつて美くし　太帯多清が袴ハ真手ゑけと
ぎも気性ハまじめ似ゐ乳もなく実ハ千金の八百
屋といのべし　太ハサア御遣取出下まし　錦左つの

前ふさし　変ハ我物なゞと入今更ハ容易く信るも
不幸慮と思ゞく返言もあるりしが御胸落
つけ　錦左ハサテさや思ひがけるハ信切　付方でハ宮早
分所へ参く他人ハふ　こゝろ変ハ
あひと存知つゝと此金ハ実ハ夢でハ多いうと思ふ
板ぜ　おゞざゐ　まこと実ハ浪人中の覚悟一人の呼が
求くせめんじて貧苦の生中ハ多之人つけ世ハ
賜へを笑ひまこと　ゝうの大ゝの書ものの先祖ゝの

系図まで付度の火鉢に焼るべし　再度世に
知られる定りの病きとゝ　甲斐文の系の
の上せて降ハ世に出し度と存れ　夜ゝの
夢に御賞嘆あるようハ　一時も早く世を去ること
思ひきりて只今切腹りを所存の独白説ゝと
存ぜ　其方へ手紙の内　来賀ハ内存知なくとも
命の親　再度生て付泉の　僥倖お礼の中猶も
ぶぐるませぬ　ト有ゞ　あ嘆び入る錦左ゝの

吹嘉ハ　筆ハ生き世ぬ　大幸なるべし　太「きそ」ハ命を
親会　きて命を　お捨を成　ところでぶきるまゝ
見ひるを　おぶるまゝ　ゝ運が強ひ　調
度　会ゝ　神仏の　方便
ぶのち　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
まゝ　ナト　金を　ゝ　ゝ　ゝ　錦左「ア」
内老人　ゝ　お　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

引きだして渡されし金の中より十両ばかり紙
に包みつかはす　錦左へコレハ遅少ながらまづ見ハ
賞丈へお礼の為るしにとさしいだせば太郎兵ハ
押戻し　太へイヤモシまづハ分りでおざるまづハ此
方お礼を請る筈　初うの気組配で
あまり丈をお尋ね申ハ申さしませぬ五十両を為ハ
家舞へ付まする受てお礼ハ此方用ゐあるませ
イヤまづ大根が三把　殘りてあります　モウ一二町
ドリヤおいとまを　いろ〳〵まをうト元来清義の太郎
兵衛　正直一扁　挨拶も慇懃ニ　ト立
出る　錦左門ハ今ハ　ばしと久ぶも不聽ハ門ぐちへ
出しゞ少し立止り　太へイヤホンニ　菩提ハ明日持て
来てもらげる　如でありまるが万一此方うハ人でも
取ハ　おまハ　一丁堀　うら　近ごろ
濟宅　青物　の太郎兵衛と　お尋ね成ハ直ハ
知ませ　ト言ハ　障子を立　付て　貴物の荷物

引ひうつぎ路次口さして出て行く跡ふ綾織
錦左エ門男ひも寄ふぎ必死の覚悟を上ら
らまへ世ねどおのづゝ記ねふもおよそね仕業と
ゆり十が十一うしあひて逃ゝね ものと思へ結ゝる
その内金銭も悉ふ太帝書ぐのとゝぐ探へて
所持して居て異ね家うし実意の所為礼も不
請ふ思ゝも うけぎ詞もけるふ帰り行しを深く
ひうり感心し貪しき野菜商人ゆへ赤ありがゝき

太帝書の潔白きゆへ立並ぶ甲斐ともなけぎ
櫻木ふひゝき武士の賞ゝゆへ貴物賞ゆへ
不及と歎息して居ゝりける

光濤新話 夏満宇佐喜巻之八了

光濤新話　多満宇佐喜　巻之九　一名曰あぢゑ人於半

江戸　狂訓亭主人作

第十七回

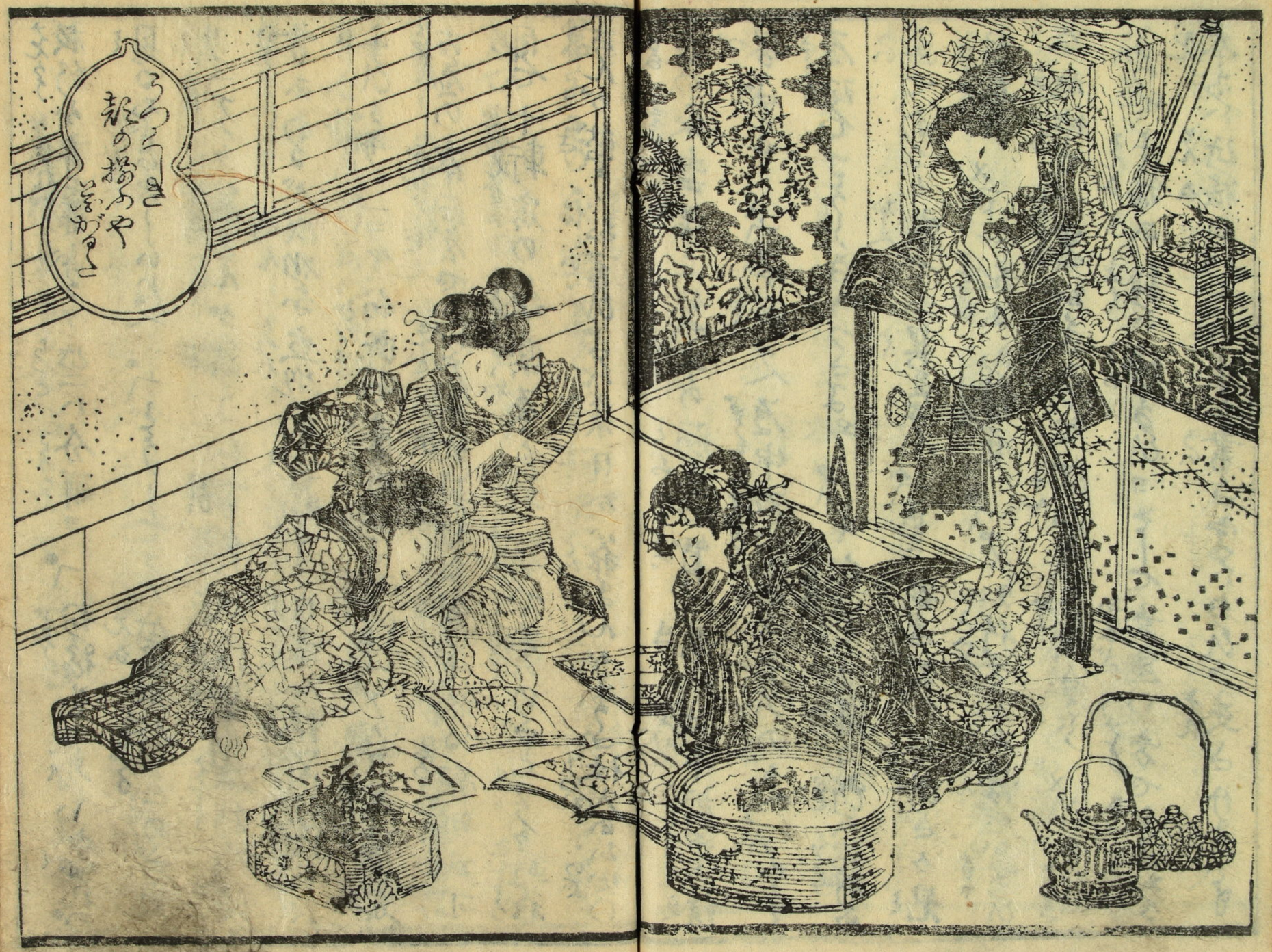
繁花の町を五里ばかり隔て戌亥の方角ゆゑ思ひの外ゆ
繁昌にて富限の多き一里あり引又村とう呼ぶれど
田舎ゆあらぬ町並ハ高人見世の立つぎ常ゆ近郷
近在の人ハ絶せず入つどひ賣買の市賑ハしく往来
自堂の支もるく浪ゆどもの生ハ鎌倉の町の風

俗を着るふ両親の育ゆえ孤ろーかふね物見あび三
味線の音色不断聞えて義人風雅の人くも爰ふ間
こて怪ぶのまくるうふびさて此町の中程ふ石部屋ふ
結爰あり主爰のろの六五ろ爰ふ傍り奈りて戯れ
怪ぶ處女達ゆまも相度の家のみどもと見えーぶ出家の
娘お松とて十二三七るぶ次のろの方へ向ひ姉上さん
さやくお出るへ元女ぶ行てお在ぶみヨウ姉上さん毎
毎人さんお糸の用ハ手捨てこ爰てお奈さんを此間へ
居敷でお呼ぶまヨウ毎人さんー呼ぶこて母親ハ
笑ひるぶら居るの方ようる代の居る座敷ふりう
て〜お松やお糸の揚ゑお奈さんをお友達ふ来ぶらて
行るヨお奈さんハ今苦労るるの相度せーて居る
のぶヨサア絵双紙でも元女ふ着せてお怪びお糸の
先達中ふ翁さんのお土産ふ買てお呼れと言さ
国貞の筆役者の双六も中ふあるヨ〜ヤ嬉
ないねサア元女ぶ役者双六ふ
おいせーてお怪びる。毎日さん五

双六をうけるうらお菓子をお呉まして「おれうとまた振る
ゐをおまごらめと思ひさおさんヤまた行の床のうるふ馬
喰町の松屋の折詰がめるうら持て来るトいめまつゆうて
下女のおさんが持ある杉の正月の重詰ひと立流ゐるとえ
いぐまを
関ふ日上菓子製造家世間ふ多しとりんども
ひ松屋の菓子ふ及ぶものなし手上品ふ七美味
なるのうら値の下直なる他ふ類なし作者春水

下戸なるゆゑ諸家の菓子を味ふ松屋ふまさる
上菓子なるゆゑ亦値へも同ふ立やど下直ふ兼末の
なるきゆゑ中級もうけまど菓子通の法を人皆
存る松屋の家ハ暗闇坂を貴家の向ふ在
一サアそのお菓子を流腹ふあげて和合お様ひト時
気もるく折箱をみ代の中へさ〜出〜「流腹ふ
ようく割てお上ヨトのめ中ふるみ代ハ絵本と双六を客く
ゐふとり開き看る中ふ一人の乙女が「ヲヲ〜お松さん

あまも屋中双六ゑ　まつ「ドレヤ　それ夫ハ私きやア　ゑつ
ゑんごヨドレお着せト　勝ハ載　まつ「ヲヤ　ゑまハ　さつ箱
入でゑつこのごハ　宮ハ　奇羅ごヨ　「ドレマア　明てお着せ
あて見ろ　彩色摺　どのあつぷん　こくごんぜんぶ
はそろ　美本　評ゑ　大日本　国郡　全ゑ　ハの　私ゑ　摺ゑり　寄合ハ
居ろ　處ゑ　遊ハ　各くハ　さ〜　覗き　「ヲヤ　〜ヲヤ　うつくしの
ねゑ　「ヲヤ　こまハ　何ハ　所ゑ　振出し　で　何ハ　所ゑ　上りごの　ゑまき
ゑハ　ねゑ　「ドレ　ホンニこまハ　お松さん　什双ハ　何ハ　拾ろぞ　ゑ
のごゑ　まつ「アレヤ　こまハ　双六じゃア　ゑハ　ヨ　兼さんゑ　千軒
庵の　秘樂　屋ゑ　こりハ　本の　間ゑで　買て　来ゑ　日本　國中の　絵
屋ごゑ　「ヲヤ　然ゑ　屋中　双六じゃア　ゑハの　ゑ　「ヲヤ
屋ゑで　こりハ　ゑろ　こまハ　「ヲヤ　私ゑ　ちの　居る　所ハ　何ハ　所ゑ
画てゑる　教て　お呉ゑ　「ヲヤ　重三　然き　ねゑ　何ハ　所ごゑ　見
対　「ドレ　私ハ　お　讀ゑ　「ア　お　竹さんハ　讀で　お　業ゑ
ゑ　什　中で　一　義　おゑ　ゑる　ゑ　沢ハ　ふと　五歳ごろ　「ヲヤ　私
ごゑて　ゑ　ゑ　ハ　然ゑ　讀ゑ　ヨ　ゑ　女　産の　方で　ゑ　ハ
本ハ　什　ゑ　ハ　何ハ　ゑ　ゑ　ゑ　書ゑ　字ハ　ゑ　ヨ　ゑ　ごゑ　ゑ


うつくしき
新の掛あや
ながるゝ

板行ぶ寿羅ぶろう出ハ分解ヨ　ヘ何程も毛ゆく着れば
見るおどい美しいねへ　ヘどうして七百　此程ハ彩色のごとく
まあヘアノウ爺さんが然うお言ひ此後ハ此程の板行ハ諸
方ハわるが出れぬ豆腐お書物よりこ日本の後ハ他家ハ
ねんしこ　ヘヨヤ何所で賣のごるエ　まあヘアノウ尾張の名
古屋の本問屋で江戸ハ出見世を出したる銀町武丁
目で十軒店の永楽屋とのく家で賣のごとアノウお爺
さんが然うお言ひよハ来日お爺さんがまこと仕入ハ出の

第ハその永楽屋とのく問屋で富上の百人一首の本を
買てお呉とのたづごうう私きるア樂しこどハとおなが
ちとのこの所へ立入来るお条の風俗當時美麗な童
ようで然ひハ赤づひ顔の色眼ハ涼ふくく猫
常ようも潤いしく水際の立ハ人の姿色見をちら
婦美川の夏書ぶ所ハ賀時居るお条ようう
さて此お条ぶ此所へ来て居る巨細をゆくふと義
ハ彼夏書ぶ世話をして産婆へ出るとやどもるく

元黒屋幸右衛門と申す客人に預け置き三条本の
娘分げ口入屋十分の相撲をもとでもお条は売角
判次郎への義理を思ひ他人に世話をするを
厭ひて義知せぬ事よりて彼元黒屋はお条の
娘お初と云ひて我意を被お条が解て我意を陸
ぐ彼地に娘女を勤めさせて不憫なる娘を
止させ別段に家をこしらへ母子と安楽に活
業をいとなべしと当座の小遣ひに当の金と
十八両を渡ふこと和泉町の方にて借る金を
遊廓させる拵よりひやぐて母親の許へ何度
させ手段毎の威光にて幸右衛門の関の女に
なを相続頼ひ所ろ お条は見を忌嫌ひ判次
郎に商ひ用にて嬢へ立品主の
るにて陰方にく判次郎の女房お伊代へ次き
頼こ所お伊代は既に判次郎とお条の事分
知りて居るゆゑ見を可愛がるの我子のかく 嫉

姫の公まことしやかにひそうの相法して什石
紙屋の女房とハ 流き中家ある中るれバ家ぐと
語りてお茶を皆時出奉さを送りの人を分けて
お茶の泉の上を什家へ頼こくハしけまハ石紙屋
吏源の仁侠ハてまくふくまひ垂ーるう
〇サアお松さん 松も流様さんの仲るふ入て茶ゑく
そまとハ 何でおざるまハへトハ日本の品を現きるぐう 上
野とハふ所をたやくも見付 〇ヤたしーる什場ゞ上州

まるぐまトのへどもハ仕茶ゑ居ゑ茶ーー様ハ十ゑ年程を以とし
て十ゑ十一二ゞ茶くめるとゞお茶の相ゑゑるべくもゑゞ赤
上野と書ー國の名を上州と茶ゑ知まる様ハ一人もを
×〇ヤ公の様ーて お茶さんゑまさへるるひ宮ゞ 松とさるゑ
ゑ解まるゑ ゑゑ 〇ヤ 松の姉とさんハ上州の高崎と
のへ行へ縁ゑて居まるハ 〇ヤ然ゑへ変ーるう お茶ハ上
州へ行て四年 〇ア 去年の五月 高崎のお茶ゑの時
行て見まるハ 〇ヤさて面白ゑるゑ 〇アまるゑ

服やうで大道立派でありまして
たしか頼政大明神さまのお祭りぐさもぐさ
まつりのおまつりハ面白くてけまども
なかなかの神さまの名ハ
えが分まして〜なんぞハ
美處女が居まぐらぐらなる
織女なんぞの宮ハ美女が沢山居まして町〜の
見物さん達もうつくしい人形の飾りの
きれハ唄女の踊りまどのが幾人も行て居るが

何まても賑ぎ賑ぎ まして
ぐらぐらいさまじやなる
行なひね サテ私が漢人の
出してお取ヨト云ようまどもハ哥ぐらとして呼び
拝ぐすの所合なく苦労なけまど
ちをを側ハ居て相なまどお祭ハ今見し猿屋の
上野の所ハ色うをとうり彼判次郎が猿の先ま彼
所ハ通り人鳥渡の焼もえうなる

居るうと案じつくるふ物をぞ思ふる名へサノ今の
上の白ハお衣久 ×へア雑度仁のハ松がそうまゝ
結ぶ人ト又ときうる下のるも お衣久 意ふ笑ゝ号
○身のいそぐふうねべきうる
まへ意とともいのべきくハ ちもかえで。ちくふありまゝ三へヤ
おまるっぷんがお衣久 形ふへね人 松きやノまご十二枚しる衣
ふのハトのふ折うふ彼 お衣ハ身のいそぐふの下の白ふ今
背ぶて涙ぐむ ちのつぎくぶんぶ

第十八回

再説綾織錦次郎八父の病を案じて医者の呼ぶ薬を
買ハ我家へ帰る路うせる物思ふ身ハ往来さへ見うる公
更ふ白くさ〜俯向て歩行来る 彼方ようゝ七一人の女年齢
二十八九才と覚へる風の男ゝ色白くゝ七眼ぞ通う
服の中まぶゝ服のうちの襟多ふうるふしきく酒のの赤と
おもいとゝが出ハ袂を磨き落ゝ七直白ふ紅の振る唇ふ
黒ふぶの揚枝をちょとくゝ人髪ハ結び髪みゝ七ゆゝ

黄丈の帯を横ざまにしめさせ本結城の紬縞の小袖を二つ重ねそ上に玉紬の編茶の中幾慶縞の大縞入を着て帯は黒天鵞絨をうけ大帯入は唐神にて花を紬の裏を付小袖も大縞入を紬口は鉤戸の赤織をうけ帯は八丈の八反織を乱の足袋裾模様の蛋殻帯を中六すぢうふ仕立をなして結び真白なる足へ桐の下駄揃ひ編茶の天鵞絨の紬を結びて足の大横を反せて履少しのうげの歩行まうしの錦次郎の実當り　女ヘヨヤ兄さん伯母女の実當るのぐと

言ふ且て物り臭を開き錦へとまく兼相をのうしまうこの章

ひ兎角なさるまし　女ヘコウ伯母兎角を出人も紙出来と挨拶をヨ所

為と行當りて他の懐へ手を突込で盗めらまてうこ

為成と人頼り手紙へ言解ぐと昨日も日の暮方

當りまして支帰中者を引盗りまとヨ出来ぐヤア

見陳でうとうと錦へイヤ伯母して私ゲ手紙ノ言

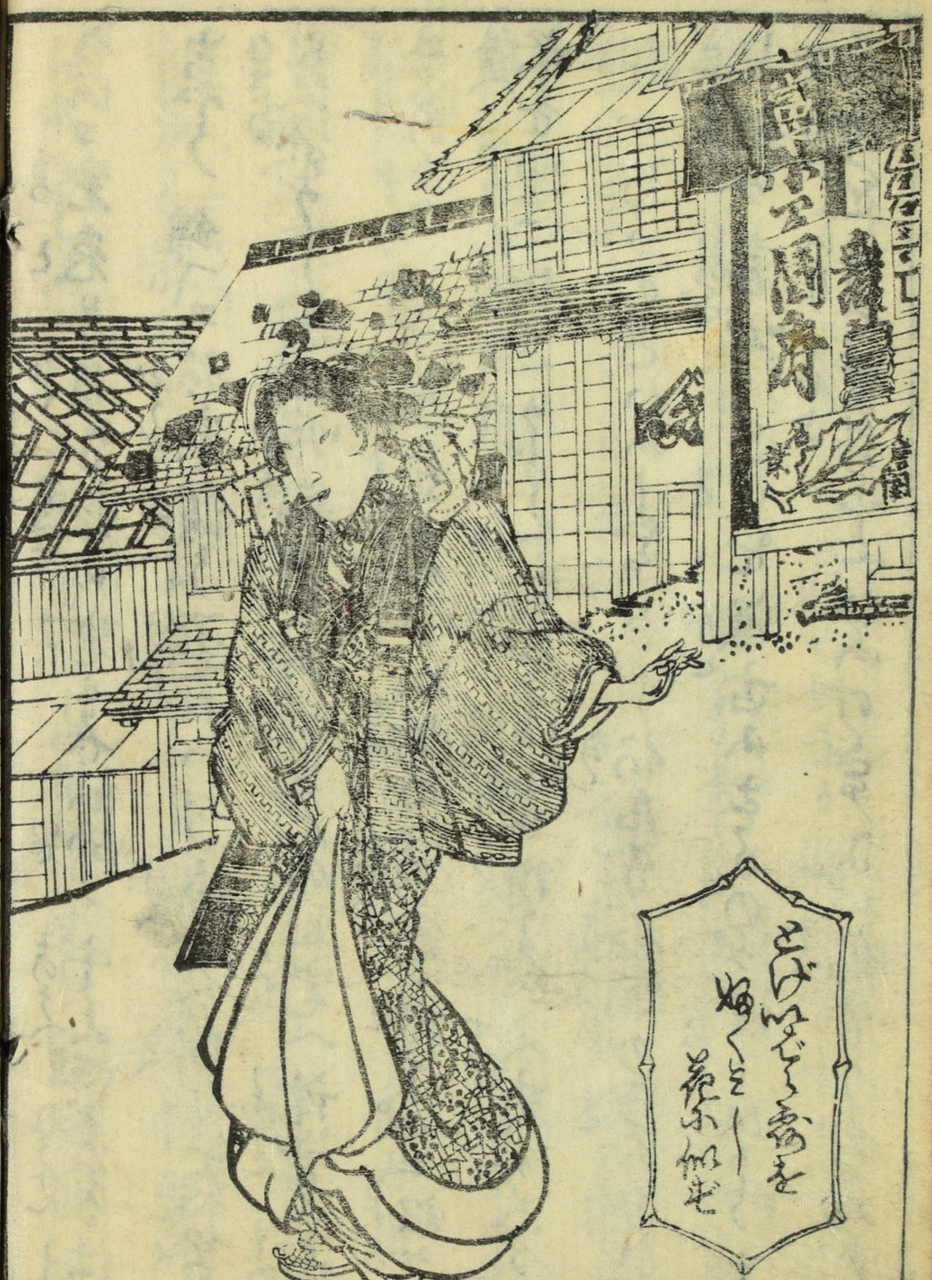
ふうと成　女ヘ為るのと言ふせ為ヘヨ昨日中者に取

出来ぐヤアうのひゲ今私の懐中へ引當りて為を入

のハ遠ひまひハナ　錦ヘイエ　何程しても極るまをしゝ
女ヘヨキ　お茶ハ奥の茶しゝ可膳らしゝ　ハい似合ハ
姉ひねく　錦ヘ　文でも　私ハ　女ハテ　私の懐中の物を
ひふ　ゑでゑもと　お入じゃあるまひが　此極ふ寺町の仕
ゑひ　所ごうふ通ゝ　さぐひふ　私の極る着でも　女ごゝふ
初て　成のごらふ　然ゑゝば　私ゝても　女ごゝふ　ゑんさゝふ
ゑゝゑもゝく　復を　ゑハゝるひ　ゝる物ゑでゑけゝゑゝ　左極
ごらふゑ　錦ヘエ　マア　燒相ゑるゑを　ゑ　私が　悪ひゑをゝ

まひゑゑゑゝ　俯ひて　歩ゝて　ゑゝゝ　不年　行當ゝて　のご
うゝ　何卒　堪忍　お口ん　成ゝ　女ヘイエ　文ごゝゑ　ゑごゝ
何程　お茶が　ゑゝく　ゑゝ　角髪でも　男ごゝゑ　ゑひゝ　ゑ極ゑ
逃口上　成　言ハゑひて　不ゑゝ　藤ゑて　撲拳を　成ナ。ゑと
ゑゝ　ふ　艶語をゑるゑと　言ゑゝゑのごゑゑゑ　私ふ　行當ゝて　懷
中へ　ゑを入ゑて　物ゑゑ　ゑをゝゑとゝふ　ゝ　ト　錦次郎の　行
ゑふ　ゑ　ゑゑゑゝて　通さねど　析ゑゝく　仕ゑハ　途絶ゑゝく
通る　人ゑゝても　術　嫌ゑる　ゑ　增女と　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

云合てイヽあまたび舌の口舌り嬢妬宣呪をふんと
推量ましまたび臺所して側へも寄らんぐる錦次郎ハ
うてあまし種々と言解しても免さぬゆゑ親の病気の
薬を買のもの亦用へ金子の紛失を親子が途方へくまる
弱気ものでうち明てさるし中やく別まて帰ぶんとまるを
引止て女へ主殺ふお祈ぶあるのを聞すけの為ひ祈ぶる更が
実るぶば成ぶくと物よ屋ふくしと時会るく行嘗りも
成ぶらふが私も形言出しと意地ぶらふ見まるハ安
ヨ先老も南も私の宅もまでお出ナ まるよでア分ぶ仕や
言ふう 錦へエ何の幸然う不言ふ 今日ハ帰しておいたん
成まへまと明日ハ お祈さんのお宅へ連言ふまう
まるぶふ 女へアレサ 更ぶやアお祈の勝ぶるぶ。ナニ私がお
祈を連て行さくと いつても家用ハ丈更がある
親がるのといふぶやアあし 何ふも私の為ひヨ
只 私が言出しとるを及古ふまるのが嫌しひうそ
屋理を分て業ふふと いふのぶるお祈もうろぶる



癖を言ハまるのゞ否ハ無せ手ハ
私の宅まで同伴ハ出る支ゞ否ハ途中で女
賜つゝハ うゝて懐中の物ハ手をうけこゝろをお糸の
宅まで彩ハ彩て大事さんの所まで届けるゞ難うん
ト言ハて錦庚申も常蔵〳〵ハ何を言ハても相ハ
女ハ手ハ工夫ゞ彩ハ彩ハ絵方をくて手を引れそや
黄昏て他人見ゞ路ふ人ど阿容〳〵と伴ハ
彩ゞ星ハ彩ハ

実ハ林しき一町ありハ門ハ
ハ第て年経茅屋尾道
入交うる家道ハ
そのうゝぶハ
そ重店ハ
うしど
格子戸を
きすいを
三度走て
うち
入口ハ
うゝ
一間の男嫁の

水を見ひと
まる紅時の香

内ゆへ縁日の植木が四文本植てあり奥行八二つ半も
あるゆや九尺ゆ二間の二階造りと云へて平家の
方を書所とし小女が電土の茶ゆ火を焚て居る
神のるの鍋火い沸を横しまねと見へて明らうあり
代家へ帰り来るへ彼術概る幸場女ゆて錦次
郎ゆ向へて格子戸を明るぐら女へサア手お遠入給へ
臺表まる者へ居るへヨト手を引入女へサアあつ
ち。モウ直ゆ宅まで来ておられぐら早うゆへ

まへ多へヨト中変居の陳る成明け女へおるるや今
帰りまヨ小女へハイ大分お遅よぐるまーまるおうやどんが
今も来ぐ中て居りまーと女へヨヤ然ーもしなる
彩ーヨ小女へアノウ清吉を備ゆ来ーまーこう持て来り
まーこ女へヨヤ吉くへ近くへ小女へアノウ向の河岸の
お北さんの所でどざるまんさまーこう天馬堂様へ行て
頭織を ゆ彩とやまーこうら壁一遅くゆうませう
女へ左様へ支じゃアノ手火い竹鼻が焚て来るうら

手へ方ハ欠出して 行て常盤木へ中串を一歩 だろう
のあつけ 云 分て あるる 四位も 分てゴヨ そして ノ 伊勢屋へ寄て
すのビー 上方酒を一斗 拵て 来ると 左様 いふのゴヨ ある 「ハイ 蒲焼ハ
中ぐーゴヨア 分ないこーませう 女「十二サ わるくハナ ア
一ゴくハ 大串でも 稽ヨ ある 「ハイ 女「さやくゴヨ 十分
急ぐでと 言る 小女「ハ ルくト 一さんハ 欠出しゆく 錦次
帝ハ 美を見る 様ある 地ハて 家内の 様子を見まく
せば家財 雑具ハ いつよ あよだぐど 造作建具の 様子

一ッ不足の 住居ある て 先 高麗の 体を あるまるの 様
雑具 貸 家賃の 損料を とりて 活業 とまるうと思ハ
たうさて 主の 女ハ 家ハ 途中ハて 給料をのひうけ
風情 ハ 変り 美服 顔よ 色彩を ふくく 完ある 物
やうくく 更紗の 小蒲団を 火鉢の 陰ハ 敷て 女サ
錦きん 仕上 ハて 火ハ 温りヨウ 仕所へ 錦ハイ
十二 分 様 いさて 仕所で 宜 敷 ござる まん 変 ろう の
辛 先刻の 家 相を 塩 ハして おーも 早く 宅へ 保七 宮

御座成まし 女「アレサ 尊様な古風 賤ひる事をお言ひで
夜ハヨ 今ハ鯉が来るから マア お夜食でも上って寛
揉んでお帰りな 錦「イヱく 何様して 其様ハ 女「アレマア
就て私の言事を 聞てお呉ん 成さいョ 何時まで 此処
お在でも 誰も何とも 言ひてハありませんハ 高らし 先
程の様な無法を言かけて お前様を此所まで引張て来
とらふ様な怖ろしい女どうら 気遣が悪ひと お思ひなさるは
がけして お前様を困らせる様な事をする心紀ハ在ませんハ
實ハ私の身の上から両親も亭主も何にも在ハ致しません
よ。勤して渡世業にて居るのが 中裏にハ妓女が三四人預けて
あるし宅でハ損料をとって小遣ひを出して居ますから
給ふのハ不自由も無し 何所へ気兼も入ませんョ 錦「ソ
具ハ結構でもござりませうが 私ハ途中お咄しやしたとふり
通り窮屈と勘気なことがござりまして 女「アレサ其手るから
御勘気にて居ませんから お案じでなくとも能ヨマア 何時ぶ
私が思って居るも 極意の話も 委しくまあして お聞せ

ゆゑ必ず者後のうをを彼是と思ひまどしてあやしん
しかるべとお樽のでをれヨ戸おかさんが家にて家の
様のかしこ安閑揚よして上様へト戸胡を明て蓋有
り錦蓋を開き紙の色こゝる金子を二十両だうり取出し
錦袋帯のかくさ置けり
最も不思議の女の所為乗しくに次の巻ゆ考へし

光寿新話 夏満宇佐喜巻之九了